



ヤマネ(写真出典;東海大学出版会「日本の哺乳類」)

ヤマネ

日本固有種。ネズミに似るが、尾に長い毛が生じ、背中に黒褐色の線が1本はいるのが特徴的。国の天然記念物に指定されている。

「あっ、ネズミ、いや、ヤマネだ!!」
ぼくの目の前1mもないミズナラの幹に突然ヤマネが現れたものだから、思わず大きな声を出してしまった。ぼくを驚かしたヤマネは、今度はぼくに驚かされてか、ミズナラの幹をすばやく登って行ってしまった。昼食を終え、さあ、キノコ狩りの続きに出かけようかと、皆が準備を始めた時だった。広いミズナラ林の中で、ぼくの周りに人垣ができていた。けれども当のヤマネはとっくにその樹の高いところへ避難済みである。ヤマネが現れてから樹上へ逃げのち、人が集まってくるのもアツという間の出来事だった。

ある日のフィールド・ノートから

出会いを通して

10月中旬の裏磐梯。昼は少し動くと汗ばむほどの陽気だが、日が沈むと足元からぐっと冷えてくる。紅葉が始まり、山の幸は旬を過ぎようかという頃。ぼくは自然体験キャンプのスタッフとして、この裏磐梯の湖畔のキャンプ場に来ていた。食べるものは美味しく、見るものは美しく、焚き火が恋しく感じる実にいい季節である。そんな季節の山の恵みを我々もわけてもらおうと、出かけた時のハプニングだった。「何処に行ったの?」「さわってみよう。」「よく見えないよ。」「さわってみたい?」思わず口に出てしまい、皆をたきつけてしまった。普通、自然観察などのマナーとして、野生の生き物(ここでは特に哺乳類のこと)にさわるとは絶対にしないのだが、このときはずっと見てみたいと思っていたヤマネに初めて出会って、完全に舞い上がっていた。「登って行って捕まえよう。」「樹を揺らしたら落ちてくるんじゃない?それを受け止めようよ。」

いろいろなアイデアが出てくる。しかし、12~13mはあるかという樹である。そう簡単に揺らせるわけもなく、また、ヤマネのいる10m近い高さの細い枝まで、人が登れるはずがなかった。じきに皆あきらめ、ぼくを含めた数人をそこに残してキノコ狩りへと行ってしまった。それから1時間、ずっとヤマネを見ていたが、動いた距離はわずか1mたらず。細い枝から木の幹に戻ただけだった。キノコ狩りに行った人が戻り、我々全員がその場を離れた後に、参加者の1人が改めて見に行くと、そこにはヤマネの姿はなかったそうだ。きっと、もっと早く降りたかったにちがいない。申し訳なく思いつつ、また、ヤマネが無事逃げられたであろうことを知り、少しほっとして帰路に就いた。

その日の夜、焚き火を囲んでいるときに、こんな声を聞くことができた。「ちょっといじめているみたいでかわいそうだったなあ。」「もっとよくヤマネを見 たかったけど、捕まえなくてよかったね。」

ヤマネには迷惑をかけたが、一度こうした経験をする事も必要なのかもしれないな、と思えた。

野生動物にさわるとは、場合によっては彼らを死に至らしめる。今回のケースとは少し違うが、飼育下にあるヤマネが、人の匂いのついた自分の子の世話を放棄した例もある。こうした例はヤマネに限らず、いろいろな生き物で聞かれる。

野生の生き物を無意味に、また、興味本位で追いつめることは許されることではない。また、偶然の場合であっても、今回のような接し方は、ヤマネをおびえさせてしまうだけで、間違いであった。だが、経験を通すことで我々はそれを初めて肌で感じたり、知識から理解へとつながることができた。次に同じようなことがあったら、それが突然でも、私を含め、皆もっと違った接し方をすることができるだろう。

また、「ヤマネ1匹ぐらいで、」という見方もあるかと思うが、大袈裟に言ってしまうと、そうした発想が多く環境問題解決の鍵を握っているのではなからうか。

自然体験キャンプは、非日常の生活の中に、自然とふれあう要素がたくさん詰まっている。自然を好きになり、理解し、つきあい方を学ぶ、そしてもっと自然が好きになれる、そうした気持ちと、知識と、技術とがバランス良く成長できる場であることをあらためて実感した。

(本社企画室・中村兼吉)

編集後記

先日、仕事をしていると、突然正面の窓ガラスに何かがあたった。なんだろうと思って見てみると、カキを投げつけたような跡がついている。子供のイタズラかと思ったが、次の瞬間、鳥がぶつかったのだとわかった。急いで外に出て探してみると、植え込みからハトサイズの鳥がふらふらと飛び去っていった。ガラスに気づかなかつたり、なわばりを主張する鳥が窓に写った自分につっこんでくることがよくあるとか。何とかしてやれないものだろうか。(中村)

急に冷え込んだ朝、今年初めて冬の匂いをかいだ。子どもの頃の記憶がいっぱいよみがえる。がさがさと落ち葉を踏みわけて通った通学路。すすきの原っぱに基地を作って遊んだこと。子どもたちが今何をして遊んでいるのか知らないけれど、外遊びがすたれていないといいな、と思う。楽しいことこの選択肢はたくさんあったほうがいい。ゲーセンも楽しいし、原っぱでひつつきむし(くつつく草の実)まみれになるのも楽しいものね。(南谷)

News Letter NO.6 1996年12月

【発行】.....株式会社地域環境計画
 発行人.....高塚敏
 編集.....南谷佳世・中村兼吉(にしむら)・西邑恵子
 東京本社
 〒154 東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル
 TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701
 営業窓口.....逸見一郎
 大阪支社
 〒569-11 大阪府高槻市古曾部町1-1-8
 TEL 0726-84-3182 / FAX 0726-84-3184
 営業窓口.....中山香代子・津田洋子